

---

# 対魔の猫～イレギュラー～

林檎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

対魔の猫（イレギュラー）

### 【Nコード】

N5323X

### 【作者名】

林檎

### 【あらすじ】

ここは現代、魔と呼ばれる人に害を成す根源と、その根源を滅ぼすべく人によって作られた対魔という力の根源があった。双方はどちらにとっても煩わしい敵であり、滅ぼすべき相手だった。そして、その【対魔の力】を扱い、魔を滅するために生まれた存在を“魔を払う神の代行者”という意味でこう呼ばれている――【魔払いの使い】と。

とある一般私立高校に、一人の少女が入学した。

その黒く腰まで流れるような滑らかな髪に漆黒の瞳を持ち合わせ、端正な顔を緊張と期待に染め、真新しい白いワンピース型のセーラー服を着こなし一歩一歩その地を確認するように歩いていった。

「やっと…ここまできたんだ」

少女の嬉しそうな、けれどどこか物足りなさそうな独り言は誰も聞くことなく皆彼女の横を通り次々に門の中に入っていく。今日は入学式とあって、生徒だけではなくその家族もいるようでたくさんの人が少女の横を通って行った。

少女も覚悟を決めたような面持ちで、ついにその門の中へと足を踏み入れた。

「これより、本年度の入学式を始めたいと思います。まずは本校の校長からのあいさつを――」

少女を始め、たくさんの生徒が色々な面持ちで体育館の壇上を見つめ、新しい生活への期待感を、新しい環境への不安感を抱えていた。その中で少女は胸を高ぶらせながら校長の話聞き流し、これまでの苦渋を反芻していた。

（ここに入るまでどれだけ勉強したことか…同い年の幼馴染にも散々駄目出しされても、挫折そうになってやけ食いしても完全に諦めることなくやってきたのよ。必ずこの学校であの幼馴染が悔しがるくらいにまで青春を満喫して綺麗に卒業してやるんだから！）

少女の意気込み。

校長の演説。

体育館の熱気。

新年度に相応しい気持ちの浮つきと、長い校長の話と、たくさんの人達の熱気と。

それらが交じり合い交錯していく中で、ゆっくりと 時 の中で物語が動き出す。

少女の日常は、彼女の感じていた平和は、非日常へと変貌しようとしていた。

体育館での入学式も無事滞りなく終わり、少女は学校の校門前の壁に寄りかかっていた。

「はあ…入学式だけだったけど案外疲れた」

初めは生き生きとさせていた顔も、今は多少の疲労感を見せていた。そんな時に少女にかかる声があった。

「ねーお嬢さん、暇なら俺と遊ぼうよ」

明らかに少女とは面識のなさそうな掛け声を、軽薄そうに制服を着崩した男子生徒が声をかけてきた。少女はそれを横目で見やると、また前を向いて男子生徒と取り合おうとはしなかった。それにム力ついた男子生徒は乱暴に少女の手を掴んだ。

「聞いてんのかよ」

「ちよっ離して下さい！人を待つてるんです！」

いくら振り払おうが、いくら力を込めようが女の力が男の力に敵うはずもなく腕を掴まれたままお互いの息がかかるくらいにまで近づいてきた。

「離してっ」

それでももかく少女に、男子生徒はもう片方の腕も掴んで少女の体を壁に追いやり、見動きができないように封じてしまった。その時、

掴まれた腕にはめている金色の腕輪が小さく、金属音を奏でた。

「可愛い顔して結構なお転婆じゃんか」

男子生徒が悪者顔でニヤリと笑い、さらに少女に近づこうとした瞬間

「おい」

後ろから男の声がした。男子生徒は舌打ちしながら後ろを振り向いたがバキツと音がして倒れこんだ。そこにはいつの間にか、男性生徒と同じ服装で茶色い髪を短髪で揃え、髪と同じ色の釣りあがり気味の鋭い瞳が男子生徒を見下ろしていた。

「汚い手でこいつに触ってんなよ」

男は固く握り締めた拳をまた振り上げようと構え、それを見た男子生徒は殴られた頬を押さえて慌てて逃げていった。

「まったく…大丈夫だったか？」

フンと鼻を鳴らして相手が逃げた方を見やったのも一瞬、すぐに少しづつきらばうに少女に安否を確かめた。

「うん、大丈夫。ありがとう」

「別に。帰るぞ」

男はそれだけ言って少女の前を歩き出した。少女はそれを小走りに追いかけて、隣に並んで一緒に歩く。その姿はさながら、恋人みたい

に見えなくなかった。

少女の名前は時宮優香。  
トキミヤユカ

今年から一般私立高校に通う高校一年生だ。

「それにしても、殴ることはなかったんじゃない？」

男の名前は犬塚漣。  
イヌヅカレン

優香と同様に今年から一般私立高校に通う高校一年生。

「面倒だ」

二人は家同士が近く、小さいころから幼馴染としてよく一緒に行動していた。今日も、優香は漣と帰るために校門前で待っていたのだ。

「面倒って…手は痛くない？」

「あんな奴殴ったところで痛むことはない」

心配そうに自分を守る為に使われた漣の手を心配そうに見つめて聞くが、漣は優香の方を見ることなく簡潔に答えた。

「なら良かった。今日は家寄ってくの？」

優香は漣が心配ないと言った言葉を信じ、話題を変えた。

「寄っていかなかった時があったかよ」

「ううん、ない」

ため息混じりに、本当に面倒そうに呟く漣に、優香は笑顔で答えた。二人が着いた先は一つの神社。その赤い鳥居をくぐり神殿前で二人は一礼をしてまた鳥居をくぐり神社を後にした。そして向かった先は神社の隣にある大きい屋敷。

「ちょっと待ってね」

優香そう言々と大きい屋敷に相應しい威厳ある門の前で淡いピンクで黒い猫のストラップが付いている携帯を取り出し、僅かな操作をしてその携帯を耳にあてた。

3秒ほどコール音がしたあと、どこかおっとりとした大人の女性の声が優香の携帯から聞こえてきた。

「あ、お母さん。うん、今家の前…もちろんいるよ」

そこで一度、優香は連を見て笑いかけた。連はどう反応していいのかわからず、仏頂面ではあったが、その場から立ち去るうとはしない。

「うん、分かってる。ちゃんと腕につけてるよ」

そう言っ、今度は携帯を持っていない方の自分の腕を少しだけ上げ、腕に嵌めている金色の腕輪を見つめる。連もそれを横目で見やるが、眉をしかめてすぐにそっぽ向いた。

「分かった。うん、また後でね」

話も終わり、携帯を閉じて自分の家の門を軽く叩く優香。すると門が内開きに開き、中から巫女装束姿を着た世話人の女の二人、優香と連を出迎えるために並んで立っていた。

「「お帰りなさいませ御子様」」

「うん、ただいま」

「「いらっしやいませ 犬塚様」」

「邪魔する」

まだ高校生の女の子が「御子様」なんて仰々しく出迎えられているのが分かる通り、優香はこの町の一番大きな神社の一人娘だった。小さいころから神社の隣に大きな屋敷が構えられている家で神主の娘として最低限の教育を受け、今では町や一都市の自治会長などと一緒に対談出来るほどの力と顔を作り上げることが出来た。

連はその時宮家と比べると少し劣るかもしれないが、それでも肩を並べても支障がないといつていいほどの社家の息子だった。犬塚家もまた神を奉り、その土地に屋敷を構え時宮と家族ぐるみで良好な関係を築いていた。

世話人に出迎えられることなど慣れっこの二人はそのまま優香の私室へと向かった。

時宮家の屋敷はとても広く、長く日本古来の赤い手すりの廊下を何本も渡つてようやく奥にある優香の部屋へと着いた。

「相変わらずここは遠いな」

漣は32畳もある広い一人部屋で溜息をついた。

「それでも狭いほうだよ。それに漣の部屋だって同じくらいじゃない？」

「いや、お前のほうが広い」

優香が鞆をベットのそばに鞆を放り投げ、制服のままベットにダイブした傍ら。漣はそばにある座布団に腰をかけ鞆をそばに置き、目の前にある丸い大理石のテーブルに片肘をついてだらしのない優香を

見やった。大きな古い社家の屋敷といえど、私室はある程度個人の趣味…もとい、年頃の女の子が愛用する近現ものがちらほらつかえる。

「おい、制服が皺だらけになるぞ」

「どうせもうすぐ来るよ」

誰が何が、とは言わない。これは毎回漣に注意されていることであると同時に優香がこの屋敷の中でも位が高いということを嫌でも再認識させられることだからだった。

優香が言い終わると同時に、優香の私室をノックする音が聞こえた。

「御子様。お迎えに上がりました」

「入っていいよ」

「失礼致します」

ドアを見向きもしない優香の前に、先程とは違う巫女装束の世話人が姿を現した。世話人は漣の前で一礼をすると、既にベットから起き上がった座っていた優香の目の前に正座をし、深く礼をして口を開いた。

「お帰りなさいませ、御子様。香理様からの言伝ことづてを預かっております」

「お母さんから？」

「はい。衣装変えの後、その足で犬塚様と共に紫陽花アジサイの間にお越し

くださるようにとのこと」

衣装変えとは、ここでは正規の衣装——正装に着替えることを指す。世話人の言葉に、いち早く反応したのは漣だった。ついていた肘を離し、世話人を睨むような目付きで詰問する。

「どうして俺まで行かなきゃならない」

「漣、目付きが怖いよ」

「お前は少し黙ってる。俺らの家はお前らに指示権でも渡した覚えはないぞ」

そんな漣のきつい言葉にも、世話人は臆することなくたった一言で漣を黙らせた。

「犬塚家当主様のご意見です」

「…ちつ」

「ほら行こうよ」

忌々しそくに舌打ちした漣の腕を、優香は引っ張り上げて一緒に部屋を出た。

先頭に立った世話人の後ろを二人は仲睦まじく——実際は優香が嫌がる漣の腕を楽しそうに掴んでいるので語弊があるかもしれないが——腕を組んで歩く。

「御子様はこちらに。犬塚様はこちらです」

二人は世話人の言葉で別々に分かれ、隣同士の部屋に一人ずつ入っていく。5分ほどして先に出てきたのは白い上衣よりも存在感を醸し出す黒い袴を着こなし、袴同様の黒い烏帽子を被り、腰には不似合いな日本刀を携えた、凜というより清冷<sup>せいれい</sup>という言葉が似合う漣の狩衣姿だった。

「はー…親父達もグルかよ」

深く溜息をついて日本刀を鞘から抜き、刃毀<sup>はじ</sup>れのチェックをしていると隣の部屋から優香が姿を現した。

「…これから人斬りでもしにいくの？」

「勝手に俺を人殺しにするな」

そう言うて優香を振り返った漣はその姿を見て軽く息を呑んだ。

深紅の袴は白い上衣に良く映え、その細い両肩から脇を通って背中  
で喋喋結びをされた細い綱の襷<sup>たすき</sup>の両端には小さな金色の鈴が小さく  
その存在を知らせていた。白くすらりとした首には黒い首輪が巻か  
れ、その首にも同じ鈴我動くたびにちりんと音を立てた。袖の下の  
ほうには赤く線上に刺繍が入っていて深紅の袴とも相まっている。  
そして腰まで流れるような艶やかな黒髪は一本の白い布によって高  
く一本に纏められていた。中にはトレーニングウェアを着ているの  
か、時々上衣の袖口の中から黒く手首までぴったりとした袖が見え  
隠れていた。

そんな普通、所謂<sup>いわゆる</sup>一般の巫女装束とはかなり異なる巫女の正装で凜  
と佇む優香がいた。

「…相変わらずその襷と首の鈴は煩<sup>わづ</sup>いな」

「仕方ないでしょ、これが正装なんだから。漣だつて銃刀法違反で捕まるよ」

「俺だつてこれも含めて正装だ」

全く刃毀れのない日本刀を鞘に戻しながらそんな軽口を叩き合う二人の前で先程優香達を案内した世話人が話しかけた。

「香理様がお待ちです」

そう言いながら二人に背を向けて歩く世話人の後を、漣は目付きの悪い目をさらに尖らせながら、優香はそんな漣を見て苦笑いしながら付いていく。

## 1 - 2 (後書き)

神社の知識がないのは大目に見てください…。

でも巫女服や神主服っていいですね。…ごめんなさい、趣味です、はい。

まだまだ出したいものがたくさんで追いついていかない…でも、趣味のために頑張ります！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5323x/>

---

対魔の猫～イレギュラー～

2011年11月15日12時07分発行